



オクラ

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
本畑の地力作り	なるべく早めに定植1ヶ月前迄全面に投入して、深耕する。(土壤深くまで肥料分が行き渡るように) 茎葉残渣は鋤込み	<ul style="list-style-type: none"> ●ラクトバチルス600g →深く、排水のよい肥沃な土を作る。 ●堆厩肥1トン～3トン ●硫安60kg (もし複合肥料ならN成分:8～12kg程度) ※堆肥・有機物が無く、砂地の場合は、硫酸カリ10kg追加。 ※このチッソは有機化し、緩効的に効く。植付け時には土壤EC:0.1～0.2 (0.3未満)に安定していることが大事。 ※もしも土壤pH:5.7以下と酸性の場合は、この時にも畑の大将<青> 60kg前後を追加する。(土の深層を中和しておく)
ウネ作りの時	ウネ作り時に、ウネ上に均等に散布。 (十分に灌水して黒マルチ・フィルムを被覆、7日おく)	<ul style="list-style-type: none"> ●畑の大将<青> 60kg ※土壤pH:6.0～6.5が好適。ただし深層も測定する事。(栽培中に6.0以下に低下させないように) pH:6.8以上の場合は田畑の大将<赤>を。 ※根コブ線虫・立枯れの心配な畑、地力のない畑、根の伸びの悪い畑ではマンゾク粒状60kgを追加。 マルチ被覆で後に酵素液を灌水しにくい場合は、この粒状を。
播種～1ヵ月	灌水、または本葉2枚目以降は葉面散布でも可	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素2ℓ前後を灌水、または500倍を葉面散布 ①播種後、手灌水に1000倍で使用→発根・発芽を揃える ②本葉3枚までに間引き(1穴4本に)この時に500倍で灌水 ※根を深層へ張らせること。チッソは効かせないこと! ※播種後15～20日で(本葉)第1葉、以後3～5日ごとに1枚展葉本葉の3枚目以降、切れ込みが深く風通しのよい、本来の葉形になる。 刻みが浅いのはチッソ過多かカルシウム不足⇒Ca液を。 刻みが深くて草勢が弱いのは 根の衰弱⇒酵素液を。
開花期	播種後40日頃 第一花の開花期	<ul style="list-style-type: none"> ●花咲くCa液500倍を葉面散布、または2ℓ灌水。 ※カルシウムで着果よく、草勢を充実させる。 ※6葉以降、各節に開花する。この第一花の蕾が見えたらカルシウムを。 ※以後、花が小さい(直径9cm以下)、黄色が薄い、早朝に一斉開花しない、花弁が萎れる等の場合はカルシウムを補給。(及び根の力を)

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法	
追肥	収穫中、半月ごとに	●硫安10kg ●畑の大将〈青〉10kg	※基本的には収穫期間中、半月に1回ずつ、同量・同時に散布。(草勢を見て)
調節	<p>収穫中の調節 半月ごと交互に、また草勢を見て</p> <p>サヤの先端までピンと強く、曲がらずに伸びる鮮緑色で、種も過熟(黒変)しない。</p> <p>キレイな五角形に張ったガクに、痛いようなトゲが生えているサヤ全体にウブ毛が覆う。</p>	<p>●根っ酵素500倍液を葉面散布、または2~5ℓ 灌水 →根を強く働かせ、草勢を維持。展葉・生長が速く、生長点(茎頂)が大きく、茎が太くなる。 ※開花節より上部が伸びなくなったら酵素液を また、開花後4日で10cmにならないほど伸びが悪かったら酵素液を。 ※もしも強風で倒伏したら、すぐに引起して酵素液を灌水。</p> <p>●花咲くCa液500倍を葉面散布、または2~5ℓ 灌水 →強い花が確実に各節に開花。葉は厚く、鮮緑色に。 チッソ過多で曲がり果が多い時にはCa液を。 ※灰色カビ、葉スス、ウドンコなどの対策は、Ca液と通風を。 ※葉カキ(摘葉)はあまりしない。もし過繁茂で広い葉が垂れ、風が通らず日も当たらなくなったら、着莢節の下1~3枚を残して下葉かき。 ※莢果の太りすぎ、硬化(すじ)、種の苦みはカルシウム不足、カリ過剰の恐れ⇒Ca液を。 ※カルシウムが効くと、収穫~調理中には粘り少なく、刻むか過熱後に始めて、濃厚な粘り(ムチン、ペクチン)が溢れる。</p>	

「オクラ」はアオイ科、東北アフリカ原産。本来は多年生、日本では一年生で栽培。高温性。(夜温23℃以上)露地(または初期トンネル)栽培。3~5月播種、5~10月収穫。西南暖地では周年の作型もある。